

【秋の地貌季語の解説】

東日本 「林檎の葉摘」(りんごのはつみ)

林檎の葉摘むたび空の深さかな 小林 富久江

林檎は手のかかる果実だ。晩春、花の盛りに摘花てまかをし、初夏には摘果作業。秋九月、林檎が実る頃になると果実が満遍なく色づくように太陽に当てる。そのために林檎の実の周辺の葉を摘み取り、光線の差し具合をベストの状態に工夫する。これが「林檎の葉摘」。葉摘の後は玉回しがある。日に当たるところと当たらないところが出ないように、お日さまへ向けて林檎を回すのである。

西日本 「卯夏」(うなつ)

大土佐の卯夏の雨の激はげしかり 和泉 修司

土佐では秋十月の陽気を「卯夏」と呼ぶ。十一月に入り、初冬の暖かい日和を小春と呼ぶのは、広く本州一円に用いられている。ところが、南国土佐の十月は日差しも衰えないで、草木も繁茂し、汗ばむ陽気が続く。このような晩秋の日和を卯夏といい、「十月卯夏」とも呼ぶ。卯月が蘇ったようだというのである。(卯月は陰曆四月の呼称。卯の花の咲く月の意。初夏である。)

出典：『語りかける季語 ゆるやかな日本』宮坂静生

『ゆたかなる季語 こまやかな日本』宮坂静生